①過剰人口＝労働予備軍について

そのような方法がまったく正しくないことは、この矛盾の科学的分析によって解明された。この分析は、過剰人口が（過剰生産および過剰（過少か？青山）消費とならんで）疑いもなく矛盾であり、そして、資本主義的蓄積の必然的結果であると同時に、資本主義機構の**不可欠の構成部分**でもあることを、確かめた。大工業が発展すればするほど、労働者にたいする需要は、国民的生産全体における、あるいは、その個々の部門における恐慌あるいは活況期のいかんに応じて、ますます大きな動揺をうけるようになる。これらの動揺は、資本主義的生産の法則であって、この資本主義的生産は、過剰人口（すなわち労働者にたいする資本主義の**平均**需要を超過するもの）がなければ、**存在することができないであろう**。この過剰人口は、あたえられたおのおのの時期に、任意の工業部門あるいは任意の企業のために、いつでも働き手を提供するだけの用意をしている。分析のしめすところによると、過剰人口は、資本主義がはいりこみさえすれば、すべての工業部門において、また工業におけると同様に農業においても、形成されるのであり、そしてこの過剰人口は、種々の形態で存在しているのである。そのおもな形態は三つある。（一）**流動的過剰人口**。これに属するものは、工業における、仕事のない労働者である。工業の発展とともに、彼らの数も必然的に増大する。（二）**潜在的過剰人口**。これに属するものは、資本主義の発展とともに自分の経営を失い、しかも非農業的な生産を見いださない農村住民である。この人口は、いつでも任意の企業のために働き手を提供する用意がある。（三）**停滞的過剰人口**。それは、普通の水準以下の条件で「きわめて不規則的に」仕事につく。これに属するものは、主として、自家で工場主や商店のために働いている、農村および都市の住民である。これらすべての人口層の総体が、**相対的過剰人口**、すなわち**予備軍**を構成する。この予備軍という術語は、どのような人口が問題となっているかを、はっきりとしめしている。これは、企業の**ありうべき**拡張のために資本主義にとって必要なものであるが、しかし常時就業していることはけっしてできないところの労働者なのである。

注）周知のように、過剰人口にたいするこの見解は、エンゲルスによってその著『イギリスにおける労働者階級の状態』(1845 年）のなかで、はじめて述べられた。著者は、イギリス工業の普通の産業循環を記述したあとで、こう言っている。

「このことからして、まさにもっとも活気を呈する数カ月間に市場の要求するだけの量の商品を生産することができるためには、イギリスの工業は、短い繁栄の絶頂期をのぞいたあらゆる時期に、職のない労働者の予備軍をもっていなければならない、ということになる。この予備軍は、市場の状況がこの予備軍の一部を、あるいは多く、あるいはすくなく就業させるにつれて、その数がすくなくなったり多くなったりする。　また市場が繁栄の絶頂にあるときに、農業地区やアイルランドや好景気の影響を比較的にうけない労働部門が、すくなくとも一時的にある数の労働者を供給することができるにしても、一方ではこれらの労働者はなんといっても少数であるし、他方では彼らもまた同様に予備軍の一部なのである。ただ一つの違いは、これらの労働者が予備軍の一部であることは、好景気になるごとにはじめてわかるという点だけである。」〔補巻２、132 ページ〕

この最後の言葉のなかで注意すべき重要なことは、一時的に工業に転じる農業人口部分

を予備軍のうちにいれていることである。これがすなわち、最近の理論が過剰人口の潜在的形態と呼ぶところのものである。（マルクスの『資本論』〔第一巻、第二三章、第四節〕を見よ。）

第二巻『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』P164~166　1897 年三月　執筆

②流浪労働

資本主義と大工業とが強力に発展すればするほど、一般に労働者にたいする需要の変動は、農業においてばかりでなく、工業においても、ますますはげしくなる。……
失業者の予備軍の形成は、資本主義一般に固有のことである。……

注）資本主義的大工業は、流浪する労働者の階級をつくりだす。この階級は、農村住民から形成されるが、主として工業労働に従事する。「彼らは資本の軽歩兵であって、資本はこれを自分の都合しだいで、時にはこちらへ時にはあちらへうごかす。……流浪労働は、種々の建設および排水作業、煉瓦製造、石灰製造、鉄道敷設、等々に使用される」（『資本論』、第一巻、第二冊、692 ページ）

第三巻　第四章 商業的農業の成長　P325~327　1896~1899 に執筆

③労働予備軍

機械制大工業の発展は、飛躍によるよりほかには、また繁栄の時期と恐慌の時期との周期的交代によるよりほかには、すすむことができない。小生産者たちの零落は、工場のこの飛躍的成長によって、いちじるしく強められる。労働者は、熱狂期には大量に工場に吸引されるかとおもうと、ほかのときには押しだされる。機械制大工業の存在と発展との条件となるものは、失業者と、どんな仕事でもやろうとまちかまえている人々との膨大な予備軍の形成である。　第三巻　第七章　機械制大工業の発展　P576

コメント

労働予備軍＝「企業のありうべき拡張のために資本主義にとって必要なものであるが、しかし常時就業していることはけっしてできないところの労働者」は活況期と恐慌をくりかえす資本主義的生産にとって必要不可欠なものである。

日本における非正規労働者、派遣労働者もまさに労働予備軍的な位置づけを持って資本に雇われている。このような不安定雇用は資本主義を廃止する以外に無くならない。